

カンシャワタアブラムシの防除対策について

カンシャワタアブラムシは吸汁による生育遅延をもたらすだけでなく、本種が分泌した甘露によりすす病も併発させます。すす病による光合成の阻害により葉が枯れ、生育が著しく遅延します。現在、県内の一部地域で発生が見られており、宮古島における2月上旬の調査の結果、本種の発生ほ場率は 100%でした。春の発生ピークを抑えるために、2月から3月に新植の夏植ほ場を見回り、薬剤防除を行いましょ。

1 生態

- (1) 無翅虫が綿状の白いワックスを背面から分泌し、さとうきびの葉裏に密な白いコロニーを形成する(図1、2)。
- (2) 成虫が幼虫を産む胎生である(図3、4、5)。
- (3) 秋に有翅虫が収穫ほ場から新植の夏植ほ場に定着し、翌春の発生源となる。
- (4) 本種は高温に弱く、木陰のススキの葉裏で夏を越す。

2 防除対策上注意すべき事項

- (1) 大発生すると吸汁害およびすす病により、さとうきびの生育が遅延するため、早期防除が重要である(図6)。
- (2) 特に新植の夏植ほ場については、2月～3月の薬剤防除を徹底する。
- (3) 薬剤が葉裏にかかるよう丁寧に散布する。
- (4) 収穫予定のさとうきびほ場や近隣作物へ薬剤がドリフト(飛散)しないように注意すること。
- (5) 捕食性天敵のマエウスジロマダラメイガの密度が高い場合は、捕食による密度低下が期待できる。
- (6) 多発生時は有翅虫が絶えず移動分散するため、一斉防除を行うことが望ましい。



図1 コロニー

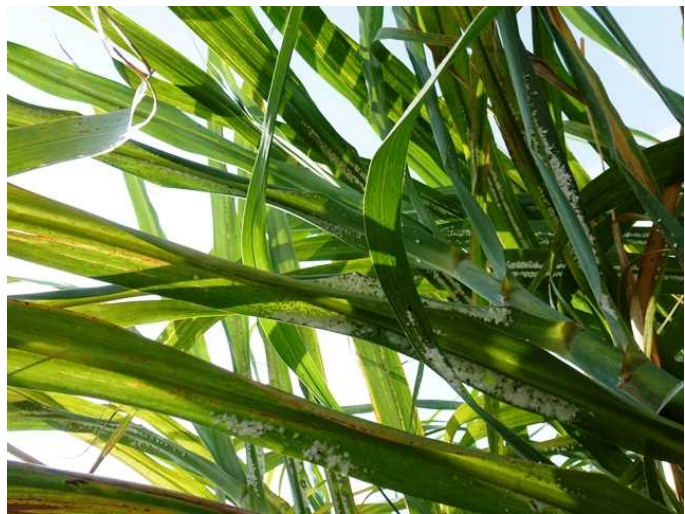


図2 寄生された株



図3 成虫(無翅虫)



図4 成虫(有翅虫)



図5 幼虫



図6 葉に発生したすす病